

Historia 歴史探訪 ヒストリア

時をかける文字

- 土器が伝える宇摩地域の識字層 -



始まりは1300年前

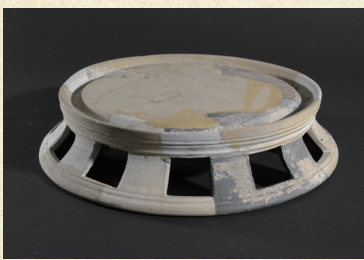
文字を読んだり書いたりできる人のことを「識字層」と言います。文字の読み書きは、現代では一般的な技能ですが、昔からそうだったわけではありません。

宇摩地域で初めて文字が使われたのは、今から約1300年前の飛鳥・奈良時代だと考えられています。

硯が伝える識字層

四国縦貫自動車道の建設に伴う発掘調査で、金生町下分にある飛鳥・奈良時代の窯跡「大小谷谷窯跡」から、「円面硯」と呼ばれる土器が出土しました。円形で中央が高く、外周には溝があり、脚部には透孔と呼ばれる装飾があるこの土器は、墨をする「硯」です。

硯は、現代では石製で長方形のものが一般的ですが、奈良時代の終わ



大小谷谷窯跡遺跡から出土した円面硯。中央の「陸部」と呼ばれる部分で墨をすり、周囲にある「海部」と呼ばれる溝に墨汁をためる。直径37.2cm、高さ8.4cm



上分西遺跡から出土した転用硯。杯という器のふたを硯に再利用したもので、ふたの内側に墨をすった跡が残されている。最大幅9.2cm。同遺跡からは円面硯も出土している

刀筆の吏

りまでは、陶製で円形のもものが主流でした。この遺跡からは、直径37センチという大型の円面硯が出土しています。このような大型の円面硯は、官衙（役所）などで複数人が共有して使うために作られたと考えられています。

また、11号バイパスの建設に伴い発掘調査された「上分西遺跡」では、奈良時代の集落跡から、食器などの須恵器（土器）を使った「転用硯」が出土しています。この遺跡からは、他にも官衙関連の遺物が出土していることから、上分西遺跡は役人が住む集落であると考えられ、この地域に識字層が存在したことを示しています。

文章を書く役人のことを「刀筆の吏」と言います。紙が身近でなかった時代、役人たちは「木簡」と呼ば

れる薄い木の板に筆で文字を書き、訂正するときは小刀で削って文字を消していました。

他にも、県内では土器の表面に墨で文字が書かれた「墨書土器」や焼く前の土器に文字が刻まれた「刻書土器」が見つかっています。木簡や土器に刻まれた文字は、私たちの遠い祖先や古代の人々の間で、文字がどのように広がり、どのように使われてきたのかを伝えています。

文字の歴史に触れてみよう

歴史考古博物館―高原ミュージアム―で開催中の「土器パズルにチャレンジ」では、今回紹介した円面硯と刻書土器の復元作業が体験できます。立体パズルになった円面硯と刻書土器に触れて、文字の歴史を感じてみませんか。

土器パズルにチャレンジ！

開催中～ 8/31（日）

¥0
FREE

四国中央市歴史考古博物館
- 高原ミュージアム -

立体パズルでタイムアタック！マグネット付きなので簡単。完成した人には記念品をプレゼント。上位入賞者には後日賞品をお渡しします！

問 歴史考古博物館
- 高原ミュージアム -
☎ 28-6260



▲円面硯 ▼刻書土器

